

札幌市立大学  
教員研究紹介  
**2015**



札幌市立大学  
SAPPORO CITY UNIVERSITY

## 1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
1	人間空間デザイン	教授	上遠野 敏	現代美術創作研究	1
2	人間空間デザイン	教授	中原 宏	創成東地区が持つものづくりの歴史を活かしたまちづくりの手法開発	1
3	人間空間デザイン	教授	羽深 久夫	北海道における民家の移築・活用 —厚真町の旧畠島家住宅の保存・再生を事例として—	2
4	人間空間デザイン	教授	矢部 和夫	地域の湿原やその他の生態系における生物多様性の保全・再生と創出に関する研究	2
5	人間空間デザイン	准教授	齊藤 雅也	共働学舎新得農場カリンパニホールの設計と温熱環境デザイン	3
6	人間空間デザイン	准教授	武田 直明	クリエイティブ人材育成のための実践的学びのデザイン	3
7	人間空間デザイン	准教授	山田 良	環境芸術の北方圏地域に果たす役割	4
8	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	サウンドアンドビジュアルを使用した空間的創造性の構築	4
9	人間空間デザイン	講師	片山 めぐみ	まちづくりの新たな担い手としての福祉施設の可能性と課題	5
10	人間空間デザイン	講師	小宮 加容子	子どもを対象にした身体・認知の発達に適したデザインに関する研究	5
11	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	個人や小規模団体のための持続的デジタルアーカイブプラットフォームの開発	6
12	人間空間デザイン	助教	金子 晋也	tiny space に関する研究	6
13	人間情報デザイン	教授	蓮見 孝	ウェルネスに着目した療養環境改善と地域創生に関する研究	7
14	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究	7
15	人間情報デザイン	教授	城間 祥之	デザイン価値の測定・評価方法に関する研究 —日本／西洋由来加工食品のパッケージデザインの印象評価—	8
16	人間情報デザイン	教授	安齋 利典	「デザインマネジメント」の授業における感性についての一考察	8
17	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	人の知覚・認知・感性機序の解明と、そのデザインへの応用	9
18	人間情報デザイン	教授	齋藤 利明	オールビスクによる球体関節人形の制作研究と空間演出	9
19	人間情報デザイン	教授	吉田 和夫	組織活性化におけるVI(ビジュアル・アイデンティティ)の活用について	10
20	人間情報デザイン	准教授	柿山 浩一郎	学生のインタラクションに関する学びを誘発するシミュレータに関する研究	10
21	人間情報デザイン	准教授	張 浦華	季節感を感じさせる生活道具の提案	11
22	人間情報デザイン	准教授	三谷 篤史	能動アート型コミュニケーションツールの開発	11
23	人間情報デザイン	講師	大渕 一博	教育支援を目的としたWeb アプリケーションの開発と活用	12
24	人間情報デザイン	講師	福田 大年	多人数の知恵を多層的に蓄積し発想を促す協創型スケッチ法「クルクルスケッチ」の開発	12

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
25	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	形状計測データを活用した表現	13
26	共通教育	教授	原 俊彦	地域社会の人口減少・少子高齢化に対する施策の研究	13
27	共通教育	教授	町田 佳世子	会話の展開構造に関する研究	14
28	共通教育	准教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	14

## 2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
29	基礎看護学	教授	樋之津 淳子	看護コンソーシアムの開発研究	15
30	基礎看護学	教授	定廣 和香子	実習安全に向けた教授活動自己評価尺度の開発	15
31	基礎看護学	准教授	大野 夏代	安楽技術の提供と「やめない看護師」の関係について	16
32	基礎看護学	准教授	古都 昌子	看護職のワークキャリアとライフキャリアの融合を目指す『子育て経験活用術』の提案に向けての検討 一子育て経験者の語りから一	16
33	基礎看護学	講師	田中 広美	看護に関連した技術と学習に関する研究	17
34	基礎看護学	助教	小田嶋 裕輝	2型糖尿病患者の首尾一貫感を高める患者教育プログラムの開発	17
35	基礎看護学	助教	檜山 明子	入院患者に対する転倒予防対策に関する研究	18
36	基礎看護学	助手	横川 亜希子	就職後早期に医療事故の当事者となった看護師の職業経験に関する研究 -医療事故の克服過程で生じた経験に焦点を当てて-	18
37	小児看護学	教授	松浦 和代	低学年児童の基礎活動力を高める転倒予防マットレスの開発と運動プログラムへの適用	19
38	小児看護学	准教授	上村 浩太	北海道の小児がん医療に携わる看護師へ向けた動画教材の開発と評価	19
39	小児看護学	講師	三上 智子	小児看護OSCE の実態と研修会開催に向けたニーズに関する調査	20
40	精神看護学	教授	山本 勝則	精神看護学におけるシミュレーション教育・患者体験の理解・日本応用心理学会第83回大会開催	20
41	精神看護学	准教授	守村 洋	メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究	21
42	精神看護学	助手	星 幸江	長期入院統合失調症患者の退院好機を見定める臨床判断要素 ~熟練看護師の関わりに焦点を当てて~	21
43	母性看護学	教授	宮崎 みち子	日本における女性の健康保護に関する法	22
44	母性看護学	准教授	渡邊 由加利	妊娠・育児期にある家族を力づける支援プログラムの検討	22
45	母性看護学	講師	森川 由紀	生殖補助医療によって出産した女性の育児期の体験	23

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	ページ
46	母性看護学	講師	山内 まゆみ	助産師基礎教育から助産師の継続教育を考慮した助産師の業務能力の支援方法	23
47	母性看護学	講師	山本 真由美	産後の子宮の観察のための「装着型産褥子宮モデル」の開発による学習効果の検討	24
48	看護管理学	教授	猪股 千代子	自然治癒力を惹起させる時空間・コミュニティの設計に関する研究	24
49	看護管理学	講師	矢野 祐美子	看護質指標の活用と質改善	25
50	看護管理学	助教	坂東 奈穂美	多様な人材で構成されたチームや組織のマネジメント	25
51	成人看護学	教授	小田 和美	生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な看護援助方法に関する研究	26
52	成人看護学	教授	川村 三希子	認知症を伴う高齢がん患者の疼痛アセスメントのプロセス	26
53	成人看護学	准教授	貝谷 敏子	看護演習科目へのループリック導入の効果・ループリック評価の信頼性と妥当性の検討	27
54	成人看護学	准教授	神島 滋子	学生が考えるリハビリテーション看護の様相	27
55	成人看護学	准教授	菅原 美樹	高度実践看護師の教育と評価に関する研究 —臨床推論・判断力強化を目的としたシミュレーション学習とその評価—	28
56	成人看護学	講師	工藤 京子	看護大学4年生に対する就職前スキルアップコースが与える影響	28
57	成人看護学	講師	藤井 瑞恵	維持透析患者の生活上の課題	29
58	成人看護学	助教	柏倉 大作	栄養状態が最も良好な状態で手術を受けるために看護師は何ができるのか	29
59	地域看護学	教授	河原田 まり子	ソーシャル・キャピタルを活用した地域保健活動の推進～自治体規模でみたソーシャル・キャピタルの特徴	30
60	地域看護学	准教授	清水 光子	都市に暮らす高齢者のソーシャル・キャピタルの実態と今後の地域保健福祉活動	30
61	地域看護学	助教	近藤 圭子	農村地域在住高齢者の自己効力感と健康に関する研究	31
62	地域看護学	助教	田仲 里江	地域保健分野におけるソーシャル・キャピタルに関する研究	31
63	在宅看護学	教授	スーディ神崎和代	意思決定を支援する医療事前指示書	32
64	在宅看護学	准教授	菊地 ひろみ	訪問看護ステーションの看護師教育プログラム開発に係る研究	32
65	在宅看護学	助教	御厩 美登里	訪問看護師の職務継続意向に関する要因 —訪問看護特有の職場環境に焦点をあてて—	33
66	老年看護学	准教授	村松 真澄	介護老人福祉施設に入居する高齢者のOral Assessment Guide(OAG)の2年間の変化	33
67	老年看護学	講師	原井 美佳	寒冷地に居住する中年期女性の尿失禁についての検討	34
68	老年看護学	助手	中田 亜由美	高齢者の外出困難要因の明確化	34

## 1. デザイン学部

上遠野 敏

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Satoshi KATONO

キーワード：現代美術、地域活性化、まちづくり

### 現代美術創作研究

#### 【研究の概要】

- 1) 「札幌国際芸術祭 2014」の招待作家として炭鉱の歴史を踏まえて札幌の近代を照射する作品を発表した。
- 2) 作家兼アートディレクターとして炭鉱遺産を活用した「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト」を実施して炭鉱の記憶を掘り起こす作品を発表した。
- 3) 日本人のアイデンティティを考察した自然神や仏性の現れをテーマにした、写真作品「ネ・申（さる）・イ・ム・光景」シリーズは日本全国を取して作品を発表した。



中原 宏

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Hiroshi NAKAHARA

キーワード：都心居住、歩いて暮らせるまち、歴史を活かした  
まちづくり、地域交流拠点

### 創成東地区が持つものづくりの歴史を 活かしたまちづくりの手法開発

#### 【研究の概要】

札幌市では「創成東地区」を都心居住の重要な地区と位置付け、まちづくり計画の策定の検討を進めている。本研究は、開拓期の札幌を支えた同地区が持つものづくりの歴史を活かし、地区的3拠点を対象に空間デザインやまちづくり手法に係る提案を行なったものである。提案した整備構想図の概要は以下のとおりである。

【北3条通】：「シンボルロードとしてのイメージ形成」と「通りとしての使いやすさ」を基本コンセプトとして、銀杏並木保全、電線地下埋設化、沿道建物景観の統一、広場の創出、赤煉瓦と札幌軟石を彷彿させる2種類のブロックによる歩道舗装等

【東4丁目線】：「歩行者重視」「緑化」「地域の歴史文化の継承」を基本コンセプトに、車線減少・歩道拡幅・ハンプやクランク設置による歩行者重視街路の創出、タウンモビリティの整備、1階部分のセットバックによる半屋外空間の創出等

【中央体育館跡地】：「集まる場」を基本コンセプトとして、隣接する中小学校の建替と連携し、札幌軟石による石張り小屋型の2棟建物とその中間のアトリウム空間に、図工室（ファブースペース）・家庭科室・音楽室・図書館を有する複合施設とし、建物の北側に大きな屋外広場を配置

羽深 久夫

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Hisao HABUKA

キーワード：建築史・都市史、歴史的建造物の保存・再生、  
建構構造・建築材料

## 北海道における民家の移築・活用 —厚真町の旧畠島家住宅の保存・再生を事例として—

### 【研究の概要】

勇払郡厚真町の民家遺構については、平成 21 年（2009）から町内全域での悉皆調査を行い、北陸の福井県・石川県・富山県・新潟県からの入植者の民家遺構が確認された。平成 23 年度（2011）に厚真町古民家推進協議会が設立され、「厚真町の古民家再生に関する提言書（平成 24 年 3 月）」、平成 24 年度（2012）に「厚真町古民家再生基本計画（平成 25 年 2 月）」が町に提出された。旧畠島住宅は町に寄付された後、平成 25 年度（2013）に移築・活用のための基本・実施設計が完了し、平成 26 年度（2014）に移築工事が竣工した。旧畠島家住宅は明治後期に建築された後、昭和初期に水害により移築されたもので、現富山県の民家形式である枠の内と呼ばれる梁をキ型に組むヒロマを有する農家である（越中造、越中建とも呼ばれる）。歴史的建造物は通常、文化財指定をして、建築基準法の適用除外を受けるが、木材の非破壊試験を行い、建築基準法第 37 条の国土交通大臣の指定建築材料の規定も認められた画期的な事例である。従来、建築基準法の適用除外で成立していた歴史的建造物の保存活用が、通常の建築確認申請で行えた。また、厚真町の枠の内の遺構は、現在の富山県ではほとんど見られない形式で建築史においても重要な遺構である。平成 27 年（2015）に町内鰈沼で越前型民家の山口家住宅が確認されたので、実測調査を行い、旧畠島家の住宅同様の保存活用を行なう。



矢部 和夫

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Kazuo YABE

キーワード：生物多様性保全、湿原再生、ビオトープ、  
山野草、緑化

## 地域の湿原やその他の生態系における 生物多様性の保全・再生と創出に関する研究

### 【研究の概要】

「低地泥炭湿原の群落の景観と種組成における地理的変位の把握とその生成機構の解明」では、北海道内の湿原群落の種組成と景観構成に地理的変異があることが判明した。

「太平洋沿岸の泥炭地湿原における高茎湿生草原の成立・維持機構の解明とその保全」では、以下のことを解明した。ウトナイ湖の高茎湿生草原は、1970 年代以前から起こった急激な水位低下で、フェンが劣化して成立したものであり、その後は湿地林に置きかえられ急速に減少した一時的な群落である。そのような群落変化の中で、貧栄養環境は高茎湿生草原の長期間の維持を可能にしている。

「人為的干渉による湿原からハンノキ林への移行メカニズムの解明」では、以下のことを解明した。ハンノキ林の発達には、安定した水位環境下での実生の定着と、中性環境で低木の成長が保障されるという 2 条件を満たす立地が必要である。急速なハンノキ林化の原因是、築堤による水位の安定化により、中性的フェンの水質で実生の定着が可能になった状態で、野火の発生後の数年間に多数の実生が定着したことによる。



美深町 松山湿原

斎藤 雅也

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Masaya SAITO

キーワード：建築設計、環境デザイン、温熱環境

## 共働学舎新得農場カリンパニホールの設計と温熱環境デザイン

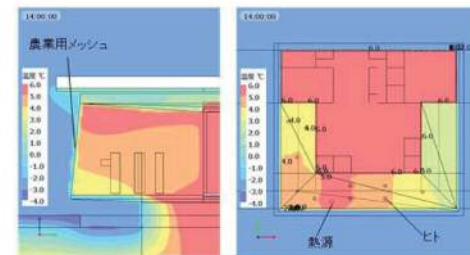
### 【研究の概要】

新得町にある共働学舎の地域交流施設 カリンパニホールの計画・設計に関わり、特に CFD（数値流体シミュレーション）によって温熱環境デザインを行なった。この施設は農場での乳製品などの生産品の販促を伴う地域交流の場として 2015 年春に竣工した。

通常、真冬には内外を隔離し暖房空間でヒトは多くの時間を過ごすが、「縁」の設えを備えることで外気の寒さを少しでも緩め、季節感・風土感をより身近に感じることができる施設とした。例えば、縁の外周に設え（農業用ビニールなど）を施すことで新たな温熱空間を創出することができる。日射と小さな熱源、何人かのアクティビティが加わると日中で 4~6°C を確保し、縁は滞在空間になる（共同研究者：川人洋志）。



Photo: Hiroshi Kawahito



真冬の[縁]の温熱環境シミュレーションの結果(Flow Designer)

武田 亘明

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Nobuaki TAKEDA

キーワード：新聞情報、デジタルメディア、紙メディア、ICT プロジェクト型学習、企画デザイン

## クリエイティブ人材育成のための実践的学びのデザイン

### 【研究の概要】

産公学民の連携による北海道の産業振興のための人材育成を実践的に行っている。特に、企画デザイン分野におけるクリエイティブ人材育成のための場の構築および効果的な教育実践方法の開発に取組んでいる。

2015 年度は、北海道と北海道博物館との連携によりリニューアルする北海道博物館の新ロゴマークおよびオープン記念ポスターのデザインに取組んだ。この過程で実業における ICT 活用やクライアントとのレビューについて学び、北海道知事から表彰を受けたものである。また、朝日新聞北海道支社と連携して、新聞情報活用に関する若者の実態に照らして、その未来のあり方の検討を行ないデジタルメディアと紙メディアの相互補完の姿を提案した。札幌駅前地下歩行空間でのイベントでは、一般市民への報告をシンポジウム形式で行なった。

これらの実戦的学びは、コーポラ教育として行なったものであるが、クリエイティブ人材育成に有効な効果が見られたものである。



山田 良

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Ryo YAMADA

キーワード：環境芸術、空間デザイン、建築設計

## 環境芸術の北方圏地域に果たす役割

【研究の概要】作品制作と発表を通じて、北方圏地域における環境芸術の役割を考察した。制作した空間と地域の風景、歴史、慣習とのつながりについて論述した。また、来往者の行動との連関を探り、今後の空間造形手法の展開への基礎とした。

学会にて公表：環境芸術学会大会 2015 口頭発表（会場：京都嵯峨芸術大学）。環境芸術学会論文集第16号へ掲載決定。

2015年度に考察と検証をおこなった作品（小樽アートプロジェクト 2015/freedom desk）



石田 勝也

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Katsuya ISHIDA

キーワード：サウンドアンドビジュアル、インタラクティブ、メディアアート、プログラミング、空間演出

## サウンドアンドビジュアルを使用した空間的創造性の構築

現在、表現活動を行う上でテクノロジーを使用する作品作りは、メディアアートという分野として認知が進み、一般の人々にも様々な場面で触れることができるようにになった。また様々な現象のデータを美しくかつわかりやすく認知させるためのサウンドアンドビジュアルをベースとしたデザインは科学とデザインの接点として年々その重要性が認識されてきている。そのような中でアート作品やメディア研究をベースに様々な活動を行っている

- ・ SIAF LAB 札幌資料館での各種活動
- ・ コーディング入門環境「スクラッチ」の各種応用
- ・ 「メディアアーツ」の調査研究
- ・ 広告映像、インタラクティブビジュアルの制作



片山 めぐみ

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Megumi KATAYAMA キーワード：コミュニティデザイン、建築計画、環境心理学

## まちづくりの新たな担い手としての福祉施設の可能性と課題

高齢者が可能な限り慣れ親しんだ地域で生活できる高齢者福祉施設の取り組みについて、事例研究およびまちづくりを実践する施設へのアドバイス・提案等を行っている。高齢者福祉施設にみられる福祉のまちづくり拠点として、I. 在宅高齢者の孤立防止・介護予防、II. 世代間交流の促進、III. 地域社会における高齢者福祉施設の資源活用などの可能性が見出された。建物内に地域交流スペースを設け、町内会の会合や地域住民を対象とした講座を運営したり、地域活動を行う住民ボランティアの活動場所としている施設がある。また、地域住民のなかから、ボランティアの人材を登用・育成したり、施設職員が活動の采配をしている場合もある。高齢者福祉施設が担うまちづくりは、高齢化し担い手不足の町内会や、担当者が異動し対応に一貫性を維持しにくい場合のあるまちづくりセンターとは異なり、適切な人材が継続的に地域の取り組みを牽引することができる。一方で、中には単に自社の業務拡大と捉えられる提案もあり、自立高齢者達の共助による地域貢献事業も補助金無しでの自立が難しく、適切な能力を持つコーディネーターの存在が不可欠であることが浮き彫りになった。福祉施設等の主体が高齢者達と共に牽引するまちづくりの評価には先行事例の蓄積とそれを基にした新たな提案が必要であることがわかった。

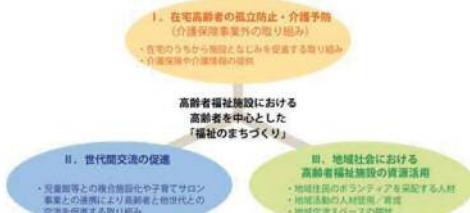


図 高齢者福祉施設にみられる福祉のまちづくり拠点としての可能性

小宮 加容子

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Kayoko KOMIYA キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン

## 子どもを対象にした身体・認知の発達に適した デザインに関する研究

### 【研究の概要】

子どもにとっての安全かつ使いやすい形状およびサインのデザインについて遊びイベントを実施（図1）し、その成果より検証・考察した。

本年度実施した遊びのイベントでは、下記の通りである。

#### 1.コネキッド in そらのガーデン「風の子GO！GO！」

8月8日、JRタワーエスタ屋上そらのガーデンとプラニスホールにて、「風」をテーマに複数の遊びを実施した。

#### 2.「〇さいからのげいじゅつのもりハコ×マチ×あそび lab!」

12月5日-2016年4月17日、芸術の森工芸館にて、参加・蓄積型の遊びを実施した。

#### 3.「けいとでおえかき」「とうめいおえかき」

12月19日芸術の森美術館、2016年2月27日さっぽろ芸文館にて、年齢差、障がいの有無に関係なく誰もが一緒に楽しむことができる遊びを実施した。

#### 4.「きになる！」

2016年3月5日-6日、「キッズワークショップカーニバルinふくしま 2016」にて、林産試験場と共同で「木育」をテーマにした遊びを実施した。



図 1. 各イベントの様子

須之内 元洋 講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Motohiro SUNOUCHI

キーワード：デジタルアーカイブ、文化資源、メディアデザイン、メディア・アーツ、メディア環境

## 個人や小規模団体のための 持続的デジタルアーカイブプラットフォームの開発

### 【研究の概要】

社会・文化活動の持続的発展のためには、それぞれの活動主体が自ら活動記録をアーカイブし、活動の振り返り・広報・ドキュメント作成・次の計画のために活用することが不可欠です。アーカイブは、持続的な社会・文化活動のための基礎となる仕組みであるといえます。

私達が日頃、情報の享受・編集・発信を行うメディア環境は多くの場合、デジタルメディアによって構成されています。メール、SNS、ウェブやスマートフォンのアプリは言わずもがなですが、ポスターや冊子などの紙媒体であっても、そこに掲載されている写真はデジタルカメラによって撮影され、テキストと共にPC上で編集・加工されたものである場合がほとんどでしょう。メディアのデジタル化が進んだことで、活動の記録＝デジタル資産を管理・運用する、デジタルアーカイブの重要性が増しているのです。

日々増え続ける多様なデジタル資産を、一元的に効率よく管理し、いつでも必要に応じて参照できる仕組みの実現には、沢山の課題があります。個人や小規模団体など、人的・経済的リソースが限られた主体であっても継続的に利用することができる、持続的デジタルアーカイブプラットフォームのあり方を検討、開発、実証しています。

金子 晋也

助教 デザイン学部（人間空間デザインコース）

Shinya KANEKO

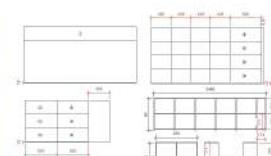
キーワード： tiny house、小屋

## tiny space に関する研究

### 【研究の概要】

本研究は、これまでに北海道沿岸部の研究（平成26年度）や北海道農山漁村の研究（平成27年度）における知見をもとに、市井の建物の地域資源として人間スケールの空間として、tiny space の可能性について検証しようとするものである。

具体的には、最小限の居住スペース、農山漁村の作業スペース、都市部における人の滞在スペース、美術品の展示スペースなどに着目している。また、個人の作業スペースを設える家具の試作も行った。これらは総じて、空間と人間の親密な関係が読み取ることができ、建築空間の構成単位として様々な特徴を示していることが明らかになった。今後は、これらの調査から得たサンプルについて、スケールやプロポーションの関係からその空間特性を検証する予定である。



蓮見 孝

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Takashi HASUMI

キーワード： ウェルネス、療養環境改善、地域創生デザイン、COC

## ウェルネスに着目した療養環境改善と 地域創生に関する研究

### 【研究の概要】

- ◆文科省「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択された「ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成事業」は3年目を迎える。教育、研究、地域貢献、広報の各活動を順調に実施した。平成27年5月9日には、多世代・多セクターの協奏的学び合いの場として構想した「まちの学校」がオープンし、多くの方々の参画・参加を得て多様な活動を展開した。
- ◆「科研・基盤（A）」（研究代表者）について：「タイム・スペースシェアリング型地域連携による地域創成デザイン研究（TSS）」は3年目（最終年度）を迎え、「若者を対象とした国際ワークショップ型二地域居住実験」を、海外も含め4大学の参加により壮瞥町で実施。また本研究の最終報告書「地域創生をデザインする 都会と地方の魅力相乗モデル開発」を発行した。
- ◆「科研・基盤（B）」、「科研・挑戦的萌芽研究」（研究分担者）について：基盤B「パワーアート」による生活機能の維持向上デザイン研究は2年目を迎え、強制呼気、嚥下障害等に着目したアートプログラムの開発を進めた。挑戦的萌芽研究「生活機能の維持向上にアプローチする「わくわくエンカレッジアート」の研究」では、わくわくする気持ちを創出して社会参加を促すプログラムデザインの開発を検討した。

細谷 多聞

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Tamon HOSOYA

キーワード： インタラクションデザイン、インターフェイスデザイン、遠隔操作、移動型ロボット

## 視覚的環境情報の電子化とその活用に関する研究

### 【研究の概要】

本研究では、遠隔実現を提供する移動型の視野提示環境を構築し、地域情報の発信に役立てる研究基盤の構築を行っています。平成27年度の実績としては、(1) 移動型ロボットの試験運用を行い、移動のための操作系の検証を行いました。また、(2) 視野映像の配信についての検証実験を行い、映像遅延の抑止策を行うためのデータ収集を行いました。

(1)については、昨年度の成果から選定したジョイティクタイプの操作卓をより高い精度で試作し、操作方法の実験調査を行いました。このことにより、ロボット本体の移動と、カメラ操作について、相互の関連をより理解しやすい改善を行うことができました。

(2)については、最新の伝送環境においてデータの収集を行い、XGAサイズ程度の映像を確認しながら、恒常に移動できる環境が得られました。また、断続的な遅延を回避できる伝送環境を実現するための指針が得られました。

以上に示した本年度の研究成果を踏まえ、28年度は、実環境での移動実験と、被験者による操作解析に研究を進める方針を立てることができました。今後も、遠隔実現を提供するロボットの移動操作環境の改善、及び、ソフトウェア上の視野情報の効率的な提示方法について研究を進めています。

城間 祥之

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Yoshiyuki SHIROMA

キーワード：感性評価、情報デザイン、デザイン価値測定、パッケージデザイン、日中比較研究

## デザイン価値の測定・評価方法に関する研究 — 日本／西洋由来加工食品のパッケージデザインの印象評価 —

### 【研究の概要】

本研究は情報コンテンツの感性価値測定・評価方法に関する研究の一環として行ったものである。本研究では、中国と日本の消費者が家庭料理用加工食品のパッケージデザインのどこに注目しているのか、両者の意識に違いがあるのかなどについて、日本由来の家庭料理用加工食品の一つであるカレーのパッケージデザインを対象に、中国人留学生32名と日本人学生35名を被験者として印象度評価実験を実施した。その結果、中国人と日本人では、加工食品のパッケージデザインとして消費者に伝達（訴求）すべき重要な感性情報である“おいしそうに見える”の印象に有意差があった。

(1) カレーのパッケージデザインに関して、それが中国製であるか日本製であるかに関わらず、中国人は「辛そうに見える物」を「おいしそう」と感じている。また、中国製カレーについては、「安心、安全を感じさせる物」が「おいしそう」に結びついている。これは、中国人が日本製加工食品には信頼を寄せる一方、“中国製加工食品をあまり信用していない”と巷間言われていることと関連があるものと推測される。

(2) 日本製カレーについて、日本人は「辛そうに見える物」と「独特的の香りを感じさせる物」を「おいしそう」と感じている。これは日本人にとって日本製カレーは馴染みがあるため、パッケージのデザインから味や香りを直接的に感じることができ、食べるシーンが想像できるものを重視したことによる推測される。

安齋 利典

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Toshinori ANZAI

キーワード：プロダクトデザイン、デザインマネジメント、  
デザインプロセス、ヒューマンセンタードデザ  
イン、ウェブデザイン

## 「デザインマネジメント」の授業における感性についての一考察

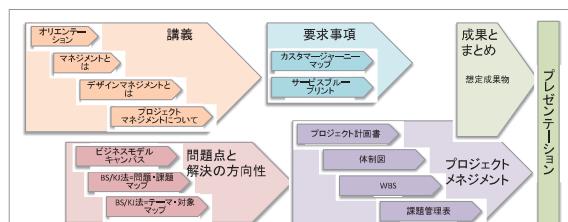
### 【研究の概要】

「感性とは、ある刺激に対して働く能動的な能力を持った働きである」[1]という定義があるが、デザインと関わる感性工学とは、人間の持つ感性をものづくりに活用することであると考えられる。

「感性を磨く」には、良い作品を見聞きし、触れ、自らも歌う、踊る、創作する等、行動することにより、豊かな感性が養われると考えられている。

ビジネス感覚は、感覚といわれるが、ある意味で、判断する感性と考えられる。最初は、新たなルールであるが、そのうちルーティン化し、徐々に身についてくる。これは、指針・考え・方法等の感性化ともいえるのではないかと考えられる。

問題意識として、創造における感性だけでなく、マネジメントの感性、判断の感性、すなわち仕事の倫理観のようなものが、デザインのマネジメントにもあってしかるべきであり、そのためには、デザインを学ぶ上で、デザインマネジメント、及び、プロジェクトマネジメント、ビジネスモデル・キャンバスのような、ビジネス視点を知って、経験することにより、早めに醸成されるのではないかと考えられる。



石井 雅博

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Masahiro ISHII

キーワード：視覚心理、認知、ヒューマンインターフェース

## 人の知覚・認知・感性機序の解明と、そのデザインへの応用

【研究の概要】良いデザインを実現するには、受け手である人間のことを熟知する必要があります。これまでの研究経験を基礎として、脳における情報処理機構の解明に取り組み、さらにその応用として、デザインプロセスや評価における科学的アプローチの構築に取り組みたいと考えています。我々は、五感を通して外界の情報を獲得し、理解したり、感性的なことを感じたり、行動を決定したりしています。これらのすべては、我々の脳でほとんど無意識的に行われています。脳における情報処理のメカニズムは、まだまだ分からぬことが多いです。私の研究室では、これらの情報処理に関するこを心理物理学という研究方法によって解明しようとしています。

齋藤 利明

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Toshiaki SAITO

キーワード：創作人形、舞台美術、グラフィックデザイン、空間演出、セラミック

## オールビスクによる球体関節人形の制作研究と空間演出

### 【研究の概要】

人形は、様々な素材や様式・技術により多種多様なものが世界各地で制作されています。私はその中でもビスクによる球体関節人形に着目し、体がすべて磁器（セラミック）でできている人形（オールビスクドール）を制作しています。

磁器は、非常に硬い素材で経年変化や素材の劣化がほとんどありません。関節が球体でできているため、関節が自由に動かすことができるため、思い通りのポーズをさせることができます。

制作方法は、原型をパーツ毎に油土で制作したものを石膏取りし、その石膏原型から流し込み用の石膏型を型取りする。磁土泥漿による流し込み技法を用いて各パーツを磁土で成型。（磁土は焼成時の白さを得る為に、焼成の難しい有田の「白磁 100」を使用）。焼成は陶芸用電気釜で素焼きし、繋ぎのゴムが通る穴を開け、表面を滑らかに研磨した後、本焼きを行なっています。眼は頭部内面より眼球部分をくり抜き、頭部内側から人間と同様の光彩を持つグラスアイを装着。各パーツはコンプレッサーを使用し均一に吹き付け塗装を行い、眼口等を手描きにより描きます。頭髪は制作する人形に合わせて、モヘアの原糸や羽毛を様々な色に染めたものを植毛しています。

人形の衣装や装飾品も全てオリジナルで、型紙を作り仮縫いをして制作。

人形制作と合わせ、展示に使用する台座や衝立なども全て自主制作して空間演出。



吉田 和夫

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Kazuo YOSHIDA

キーワード：ビジュアル・アイデンティ、視覚伝達デザイン、広告

## 組織活性化におけるVI(ビジュアル・アイデンティティ)の活用について

### 【研究の概要】

企業、行政機関、地域などの組織体がそれぞれの目的で行う活動の過程で、視覚的象徴=VI(ビジュアル・アイデンティティ)が果たす役割とその機能性を、主に実地のデザイン制作を通して探っている。具体的には①地域の企業や自治体からの受託業務、②教育目的のデザイン活動として、地域の活性化および連携をテーマとした課題を授業などで取り上げて指導および制作をおこなっている。また、札幌市立大学における実践的VIデザイン活動なども併せて、その手法と決定プロセス、成果などを「社会の中デザイン」という視点で授業教材として展開している。



柿山 浩一郎

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Koichiro KAKIYAMA

キーワード：インタラクション、シミュレータ、教育

## 学生のインタラクションに関する学びを誘発するシミュレータに関する研究

### 【研究の概要】

近年の製品は電子化が進んでいることから、複雑な人と機械の対話をデザインする高度な能力を学生に身につけさせる必要がある。このようなインタラクションを学びとして提供するには、インタラクティブな人と機械の対話を体験的に学ぶことのできるシミュレータを教育の場に適用することが効果的と考えた。

以上の見解から、コンピュータを用いた講義内において、実際に学生がインタラクション（操作）を含む製品等の操作を模擬的に行うこと

ことができるシミュレータを作成した。

本シミュレータは、試作レベルでの完成度を達成することができたが、実際のPCをもちいた講義において試験的に学生に試用させる試みを行った。結果、大きなトラブルもなく、学生は試用を終えることができた。

今後は、本シミュレータを中心に添えた、教育プログラム（学生へのタスク提示や体験プログラムの検討、ソフトウエアシミュレータの社会的な位置づけや効果に関する教材作成、等）の検討を行う計画である。



張 浦華

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Puhua ZHANG

キーワード：感性価値、精神的豊かさ、日々の暮らし、  
湧泉、DRY LEAF BOWL

## 季節感を感じさせる生活道具の提案

### 【研究の概要】

日照時間が短く、長い冬の北海道では、日々の暮らしの中での精神的な豊かさを大切にすることが特に重要である。日常的に使う生活道具やインテリなどの常に目に触れるモノに対して実用的な機能性だけではなく、形や表情、物語性など精神的な豊かさに繋がる感性的機能を表現することによって、ささいな満足感や幸せ感を得ることができることを陶器作品の提案によって試みた。本研究は心に豊かさをもたらすことを陶器作品の提案によって試みた。陶器制作を通じて、冬でも春、夏、秋への連想が広がる手掛けりを作品に織り込むことにより、季節を感じさせることをテーマにした生活道具の制作提案を行った。

左図 DRY LEAF BOWL

(ANBD Cheng Du 2015)  
右図 湧泉 (道展 2015・佳作賞受賞)



三谷 篤史

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Atsushi MITANI

キーワード：インタラクション、メカトロニクス、  
アートフルリハビリテーション

## 能動アート型コミュニケーションツールの開発

### 【研究の概要】

能動アートとは、「見て、触れて、より深く鑑賞するハンズオン型アート」と、「アートに自らの表現を付加するマインズオン型アート」の2つの要素を加味した概念である。この概念をコミュニケーションツールに取り入れることでツールに対するさらなる愛着感を誘発し、継続的な触知行為をもたらすことができると考える。これまでに、小児病棟に入院している患者を対象として、独自のナースコールを制作する「ナースコールアート」ワークショップを実施してきた。これらのワークショップでは、自作のナースコールに対して「話しかける」、「つかんで離さない」、「大事そうに両手で持つ」といった、従来ナースコールとは異なる触知行為が見られた。今後はこれらをさらに発展させ、アートやデザインによってリハビリテーションの効果を高める「アートフルリハビリテーション」へと発展させていく予定である。



大渕 一博

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Kazuhiro OHBUCHI

キーワード：システム開発、教育支援、OSCE、モバイル

## 教育支援を目的とした Web アプリケーションの開発と活用

### 【研究の概要】

本学の開学以降、看護学部で実施されている OSCE（オスキー／実技試験）を効率的に運用するための支援システムを開発してきました。特にこの数年は、タブレット端末を使ったシステムを運用しています。今後も、デザインと看護の連携という視点から、看護学部の教員とともに、システムの機能強化を図っていきたいと考えています。

また、昨年度は、担当科目であった「学外実習 A（インターンシップ）」において、受講 学生と研修先企業とをマッチングするためのオンラインシステムを開発・運用し、從来担当者が手作業で行っていたものを大幅に効率化することができました。さらに、「学部連携演習」では最終報告会での教員評価を短時間で集計するシステムを構築し、集計担ための支援当者の業務負担を大きく軽減しました。

このように、オンラインシステムを活用することで、作業の自動化・効率化が図られることから、引き続き様々なニーズに対応したシステム開発を行っていく予定です。

Stn.A／採点者：採点教員01

課題1：第1グループ-1  
看護1年#004 (A00004)

設問	設問項目	評価欄		
		2	-	0
1	血圧測定 1 ▶採点基準を見る	2	-	0
2	血圧測定 2 ▶採点基準を見る	2	1	0
3	血圧測定 3 ▶採点基準を見る	2	1	0

福田 大年

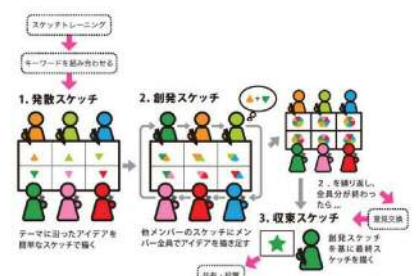
講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

Hirotoshi FUKUDA キーワード：インターラクション、協創、アイデア生成

## 多人数の知恵を多層的に蓄積し発想を促す 協創型スケッチ法「クルクルスケッチ」の開発

私の研究のメインキーワードは、「デザイン・インタラクション」です。ヒト・モノ・コトの関係をデザインする方法の構築、実践活動をしています。近年は特に「身の回りの素材とテクノロジーの組み合わせ、地域資源を発掘するコンテンツ」、「地域の様々な人が関わるデザイン活動（協創）」などに注目しています。

「協創」については、スケッチを活用した思考の図示化に着目したアイデア生成法を2011年に考案しました。スケッチのメリットを活かして、個人の創造性と他者との協調性を連動させ、多人数の知恵を多層的に蓄積し、発想を促す手法「クルクルスケッチ」です（右上図：クルクルスケッチの流れ、右下図：実践例）。現在は活用範囲を広げるために改善を繰り返しながら、学内・地域の活動で活用しています。



松永 康佑

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

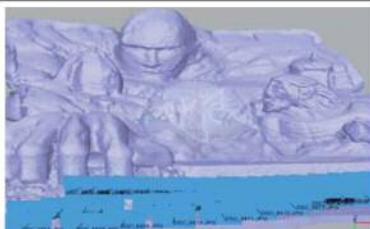
Kosuke MATSUNAGA

キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、モーションキャプチャ、数理造形

## 形状計測データを活用した表現

### 【研究の概要】

さっぽろ雪まつりアーカイブ（左上）  
リアルな顔の制作（右上）  
人体データに基づく手続き的造形（左下）  
フェイシャルプロジェクションマッピング（右下）



原 俊彦

教授 デザイン学部（共通教育）

Toshihiko HARA

キーワード：少子高齢化、人口減少、地方創生、人口社会学、家族社会学

## 地域社会の人口減少・少子高齢化に対する施策の研究

SPACE NIRA

日本語 | English

ホーム > コラム一覧 > Unit 03-B: 地方創生における少子化対策の在り方とは？

### Unit 03-B: 地方創生における少子化対策の在り方とは？

札幌市立大学デザイン学部教授 原 俊彦

2014年、日本創成会議が「ストップ少子化・地方元気戦略」<sup>1)</sup>を発表、「人口再生産力に着目した市区町村別将来推計人口」とともに「人口移動が収束しない場合の全国市区町村別2040年推計人口に関する地図」で、「20~39歳女性」が50%以上減少する地域を明示し『地方消滅』の可能性を示唆したことはまだ記憶に新しい。これが契機となり『地方創生法』<sup>2)</sup>が施行され『まち・ひと・しごと創生本部』<sup>3)</sup>ができ、2015年現在、全国の市町村は「地方人口ビジョン」・「総合戦略」の策定に奔走している。

まず地方は「消滅する」かという問題。この推計では「純移動率（噂では純移動数）が変化しないと仮定」（高齢化や少子化の影響もあり純移動率（数）はすでに低下傾向にある）、「各市町村と都道府県や全国推計との整合性がない」（個々の市町村の値を合計すると都道府県や全国値から乖離する。統計学的には人口規模が大きい方が結果の信頼性も高く安定的なので、それにあわせ市町村間の補整が必要）など、専門家からみるとかなり乱暴な推計で、全般的に人口減少や高齢化率は社人研推計より過大となっている。さらに「消滅可能性」の基準を「20~39歳の女子人口が現状の50%未満になる」としているが、なぜ50%未満になると消滅可能性が高くなるのか、その根拠も謎なまま、基準に従えば東北・北海道は80%以上の自治体が「消滅」するとされた（全

(http://www.spacenira.com/columns/1339.html)

町田 佳世子 教授 デザイン学部（共通教育）

Kayoko MACHIDA キーワード：会話、雑談、コミュニケーション、会話分析

## 会話の展開構造に関する研究

### 【研究の概要】

コミュニケーションの手段である会話の構造を研究しています。雑談は日常会話で頻繁に生じる相互行為ですが、初対面やよく知らない人と雑談することは容易ではなく、それができないために人付き合いに苦手感を持つこともあります。雑談をうまく展開している実際の会話を詳細に見ていくと、発話連鎖にいくつかの特徴が見いだせます。例えば、相手の発話の一部や全体を繰り返したり、相手と協働して一つの発話を完結するという方法です。

また話題の展開方法にも特徴があります。例えばいきなり自分の話したいことを話し出すのではなく、まず相手にその話題で質問し相手に話させてから自分が話すという方法や、相手の発話の中で少しでも知っていることがあれば知っていると述べて相手との共通性や自分にとって関心のある話題であることを示す方法です。これらの展開方法は多くの研究すでに指摘されていますが、今回の研究では、ぎこちない雑談では、このような方法がほとんど使われていないを見出しました。従って、何か話がはずまないときは、どちらかともしくは双方が、これらの方法を実行していないことが原因の1つではないかと思います。雑談は何を話すかも難しい課題ですが、会話展開の仕方を意識することで、人見知りと思う人たちも、雑談の展開が少しばかり楽になるのではないかと考えています。

松井 美穂 准教授 デザイン学部（共通教育）

Miho MATSUI キーワード：アメリカ南部文学、黒人文化、ウィリアム・フォークナー、モダニズム

## アメリカ南部文学研究

### 【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920~50年代)の文学を中心に研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素がその社会の個々人のアイデンティティと、あるいは社会システム自体と深く関わっています。そういった歴史的・社会的・文化的背景をもった南部の作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを分析しています。平成26年度は、南部の白人紳士におけるアイデンティティ（ホワイトネス）の不安定さを、黒人性（ブラックネス）との関係から考察した論文を発表しました。また、南部家父長制における搅乱的な南部淑女の（可変的な）アイデンティティの有り様についての論も発表しました。このように、一見確固としているようにみえる、南部の人種／ジェンダー・アイデンティティも実は不安定で可変的なものであり、人種／ジェンダーにおける境界線は常にすでに侵犯されていることを考察しました。

## 2. 看護学部

樋之津 淳子 教授 看護学部（基礎看護学領域）

Atsuko HINOTSU キーワード：看護技術、看護人間工学、看護コンソーシアム

### 看護コンソーシアムの開発研究

#### 【研究の概要】

医療現場の大多数を担っている看護師がいきいきとやりがいを持って専門職業人としてのキャリアを作り上げていけるかどうかは、各医療施設のみの問題ではなく、少子高齢化が急速にすすみ、看護職が不足する日本において最も深刻な課題の1つである。大学と医療施設が協働して新しい形の看護師研修などを企画・実施することは国内ではまだ未着手の構想であり、その効果検証を行い、エビデンスを確立することによって大きな波及効果がもたらされると考える。

定廣 和香子 教授 看護学部（基礎看護学領域）

Wakako SADAHIRO キーワード：実習安全、看護教育、ファカルティ・ディベロップメント、自己評価尺度

### 実習安全に向けた教授活動自己評価尺度の開発

#### 【研究の概要】

看護学実習中に学生が医療事故を起こさないようにするために、教員は様々な事故防止対策を講じている。看護学教員が実習中の医療事故防止に向けて講じている対策を自己評価する尺度の開発を目指し、平成26年度から、研究活動に取り組んできた。

平成27年度は、平成26年度に作成した自己評価尺度の試行版を改良した。この尺度を用い、全国の看護学教員1084名を対象として、郵送法による質問紙調査を行った。604名の教員から返信があり、有効回答582部を対象に信頼性・妥当性の確保に向けた分析を行った。分析結果に基づき、40項目から34質問項目を選定し、「実習安全に向けた教授活動自己評価尺度」が完成了。この成果は、平成28年度日本教育学学会学術集会で発表予定である。

また、「実習安全に向けた教授活動自己評価尺度」試行版による調査データを分析し、総得点に最も強く関係する教員の特性を明らかにした。その結果、看護実践能力が高く、実習指導に対してやりがいを持ち、教員と指導者が共同して指導する体制を構築している教員は、実習中の医療事故防止に向けた活動の質が高いことを明らかにした。この成果は、平成28年7月に米国にて開催される2016 International research congressに採択され、口頭発表を行う予定である。平成28年度は、作成した自己評価尺度を活用したファカルティ・ディベロップメントプログラムを作成予定である。

大野 夏代

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

Natsuko ONO

キーワード：マッサージ、看護技術、安楽

## 安楽技術の提供と「やめない看護師」の関係について

### 【研究の概要】

マッサージによる安楽を、より多くの患者に安全に提供するための研究をこれまで行ってきた。関連病院の協力を得て、研究成果を臨地にて応用する活動を継続している。これまでに500例の患者を対象に、安楽を促進するマッサージを実施した。

臨地の場で患者を対象とするマッサージには特有のリスクがあるが、特別な「やりがい」を感じられる。今回私たちは、患者にマッサージをした際に、ケア提供者である看護師自身が感じる「気持ちの良さ」に着目した。患者に触れ、心地よさを創出するような看護体験により、看護師は患者の反応を直接的に感じ手ごたえを得ることができるのでないか。またその結果、看護師は患者との関係の中で「満たされる思い」を感じることができ、イキイキと働き続けることができるのでないか、と考えた。

「実施者の気持ちの良さ」を体験的に吟味し、「やめない看護師」との関係を模索したい。

古都 昌子

准教授 看護学部（基礎看護学領域）

Masako FURUICHI

キーワード：ワークキャリア、ライフキャリア、子育て

## 看護職のワークキャリアとライフキャリアの融合を目指す 『子育て経験活用術』の提案に向けての検討 —子育て経験者の語りから—

### 【研究の概要】

看護職のみならず、就業する女性にとって子育てとの両立には多くの葛藤が生じる。ワークキャリアとは仕事上、発達してきたその経験全てを指し、ライフキャリアとは人として発達してきたその経験（結婚、子育て、介護など）を指す。子育て支援は種々取り組まれつつあるが、未だ十分とはいえず、看護職として子育てしながらの就業には幾多の困難があり、就業継続への影響は周知の如くである。ワークキャリアとライフキャリアを融合し、子育て経験活用の術（すべ）を可視化できれば、就業継続に困難を感じる看護職や、職場復帰への不安を感じる看護師への支援につながる。研究方法は、50代のキャリア後期の看護師で子育てを終えて子どもが成人として自立している看護師7名の協力者にインタビューを行い、語りを分析した。

協力者は、紆余曲折の子育て経験の中で「どうにもならない限界もあると知る」「他者との良好な関係を築く」「子どもから教えられて発奮する」などの個々の経験において「患者・家族の心理に精通する」「立場を置き換えてその人の立場で対応する」「看護職として生きる大切さを実感する」などを感じながら、逞しく、多様で臨機応変な対応により、経験を重ねていた。子育てをしながら就業する看護職として、逞しさや痛みのわかる経験が、看護職としての発達にも関与しうることを意識化する必要がある。

今後、『子育て経験活用術』の可視化から、キャリア支援につなげることが課題である。

田中 広美

講師 看護学部（基礎看護学領域）

Hiromi TANAKA

キーワード：看護技術教育、看護学実習、学習

## 看護に関連した技術と学習に関する研究

### 【研究の概要】

看護者等が安全にかつ身体的負担が軽減できる医療製品の研究・開発に関わり、現在は、企業と提携し商品化にむけ取り組んでいます。

また、看護のキャリア形成につながる看護師および看護学生に関する看護技術や看護師の学習を支援する教育や研究に取り組んでいます。

小田嶋 裕輝

助教 看護学部（基礎看護学領域）

Yuki ODAJIMA

キーワード：患者教育、慢性疾患、首尾一貫感

## 2型糖尿病患者の首尾一貫感を高める 患者教育プログラムの開発

### 【研究の概要】

糖尿病患者は食事療法・運動治療・薬物療法などの治療に伴う日常生活の制限を生涯にわたって受けることになります。しかし、治療の実施や実施に伴う生活管理に苦悩している実態が報告されています。近年、2型糖尿病患者の生活管理行動や負担感情に関連する要因の1つとして首尾一貫感が着目されています。首尾一貫感とは全体的な物事への志向性のことで、把握可能感、処理可能感、有意義感の3つの下位概念からなります。首尾一貫感を高めることで、患者自身が歩んできた病気に至るプロセスが一つの筋道として捉えられるようになります。また、そのことにより、悪化や進展の予防につながるような、一貫した生活が患者自身の力によって行われることにつながると考えています。この首尾一貫感は看護師の支援と関連があることが分かっています。そこで、現在、2型糖尿病患者の首尾一貫感を高める集団教育プログラムを開発し、その効果を検証することを目的とした研究に取り組んでいます。この研究は2段階で行っており、第一段階は、集団教育プログラムの開発をする段階であり、第二段階は開発した集団教育プログラムを検証する段階です。現在は第二段階の研究に取り組んでおります。研究成果を糖尿病教育入院の質改善につなげていければと思っています。なお、研究を進める中で、回復過程看護の重要性を実感しています。そこで、将来的には回復過程看護の構造と機能を明らかにする研究に取り組んでいきたいと考えています。

檜山 明子

助教 看護学部（基礎看護学領域）

Akiko HIYAMA

キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全

## 入院患者に対する転倒予防対策に関する研究

### 【研究の概要】

病院の中で最もも多い医療事故である転倒を予防するためには、予防対策につながるように転倒を予測する必要がある。

そのためには、入院患者の転倒リスク因子を確認するだけではなく、転倒リスクの高い行動特性を有するかを確認していく必要がある。

そこで、本研究は転倒リスク行動アセスメントツールを作成した。臨床で使用できるように、高い転倒予測精度が求められるため、4 病院 11 病棟において 4 ヶ月間前向き調査を行った。

その結果、感度 80.0% (95%CI : 0.63-0.98) 特異度 74.8% (95%CI : 0.71-0.78)、精度 74.9% (95%CI : 0.72-0.78)、陽性尤度比 3.17 (95%CI : 2.46-4.08)、陰性尤度比 0.27 (95%CI : 0.12-0.61) であり、日本の病院で多く使われているツールや海外で多く使われるツールと比較しても、高い予測精度をもつことが明らかになった。

この結果は、これまで病院で一般的に行われていた「機能障害に焦点をあてた転倒予測」に加え、日常生活行動の中で発生する「特定の行動特性に焦点をあてた転倒予測」という新たな視点を取り入れる可能性を示すものである。また、行動特性は患者自身の自己評価にも使用できるため、発展性があるといえる。

今後も継続して研究をすすめ、効果がある転倒予防対策について明らかにしていきたい。

横川 亜希子

助手 看護学部（基礎看護学領域）

Akiko YOKOKAWA

キーワード：就職後早期、医療事故、経験、克服

## 就職後早期に医療事故の当事者となった 看護師の職業経験に関する研究 —医療事故の克服過程で生じた経験に焦点を当てて—

### 【研究の概要】

研究者は、本研究の初期的研究において就職後 1 年以内に医療事故の当事者となった看護師のうち職業を継続している看護師の経験を表す 14 の概念を創出した。初期的研究の研究対象者をネットワーク・サンプリングで探索する過程から、現在は新人看護師への継続教育が充実し、新人看護師が重大な医療事故の当事者となることが少なくなっている一方、1 人立ちした後の 2 年目看護師が医療事故の当事者となりやすい可能性が示唆された。医療事故の当事者となった看護師は、経験年数が短いほど心理的な影響を受けやすいことが明らかとなっており、初期的研究の対象者探索の過程を通して、事故の当事者となりやすい 2 年目看護師まで対象を拡大し、その経験を明らかにする必要があることが示された。

そこで、就職後 2 年以内に医療事故の当事者となった看護師のうち職業を継続している看護師の医療事故の克服過程で生じた経験を説明する概念を創出することにより、その総体を明らかにし経験の特徴を考察することを目的に研究を実施した。現在、データ収集を行い分析中である。

松浦 和代

教授 看護学部(小児看護学領域)

Kazuyo MATSUURA キーワード：安全教育、小学校、低学年、基礎活動力

## 低学年児童の基礎活動力を高める転倒予防マットレスの開発と運動プログラムへの適用

### 【研究の概要】

#### 1) 転倒予防マットレスの仕様に関する検討

転倒予防マットレスは、現在、低学年児童の身長、脚力や歩幅等の身体的特徴を考慮し、1辺が43cmの正方形で、厚さ5cmのウレタンフォームをターポリンで縫製し、平面型・低反発型・傾斜型・ピラミッド型・ピーズ型の5種類を作成している。

今年度は、A小学校における過去3年間の活用実績を踏まえて、使用頻度に伴う形状の変化、摩耗や劣化等について聞き取り調査および観察を実施した。小学校教員4名（教頭1名、生活指導担当教員1名、学級担任2名）による総括評価では、科目体育における教具としての丈夫さは備えている、活用しやすいサイズである、児童が好む教具である、という意見が得られた。使用を2年間継続した転倒予防マットレスを観察した結果、傾斜型・ピラミッド型では四隅の摩耗と突起部の鈍化、平面型・低反発型では中央部分のへこみが生じやすかった。また、平面型・低反発型・ピーズ型ではターポリンの型崩れが生じやすいうことが分かった。さらに、5種類の耐用性には差があることを把握した。科目体育における使用中に、滑る・転ぶ等の事故は発生していなかった。

以上のことから、改善点として、①型紙を内側に1~3mm縮小、②縫製時に伸縮性のある糸を使用、③傷みの程度に応じて各マットレスをベースシートから取り外す仕様（マジックテープによる固定）とし、④ターポリン布の厚さを増すことが示唆された。

#### 2) 活用事例

平成27年度から3年間の予定で校舎新築工事を行う札幌市内1小学校の1・2年生児童を対象に、教科体育において転倒予防マットレスを用いた運動プログラム（所要時間10分）を実践し、基礎体力の予示指標の変化および学校管理下の活動における受傷状況を評価する予定であった。しかし、着工が遅れ、1・2年生児童を対象とした運動プログラムの導入は2016年9月以降の予定である。現在は、休み時間等に転倒予防マットレスを自由に使用してもらっている。

現在、北海道内の子どもの体力は全国最低水準にある。この問題は、文部科学省が行う全国体力テストを北海道が初めて実施した2008年度以降2015年度（最新値）まで一貫して指摘され、児童の体力向上に向けた今後の取り組みが課題となっている。その一助として、転倒予防マットレスは低学年児童の基礎活動力だけでなく、基礎体力の向上にも有効な教具として活用可能ではないかと考える。

上村 浩太

准教授 看護学部（小児看護学領域）

Kouta UEMURA

キーワード：小児看護、小児がん看護、看護師への継続  
学習支援、子どもと遊び、子どもと死

## 北海道の小児がん医療に携わる看護師へ向けた 動画教材の開発と評価

【研究の概要】 小児がん医療・支援のあり方に関する検討会は、日本の小児がんの年間発症患者数は2000~2500人と少ないが、診療は約200施設で行われ、医療機関によっては少ない経験の中で医療が行われている可能性があり、必ずしも小児がん患者とその家族へ適切な医療が届けられていないことを指摘した。

北海道において、小児がん医療に関わる可能性のある看護師数（推計）は850名前後である。北海道内の小児専門看護師は3名、小児救急認定看護師は5名の登録であり（平成27年2月）、小児がん患者・家族と関わる大多数の看護師はジェネラリストである。

ジェネラリストである看護師のケアの質を向上させるには、小児がん看護について学ぶための時間確保と、質を高めた学習内容を企画する必要がある。

そこで、本研究の目的は、看護師の主体的な継続学習の機会を保障するため、いつでもどこからでもアクセスできる動画学習教材（10分）を開発し、その評価を行うことである。

平成27年度は、小児がん看護に携わる新人～一人前レベルの看護師に向けた学修コンテンツの内容と構成を考案し、29つの学修コンテンツのスライドを作成した。今後、動画教材化し、展開・評価を行っていく。

三上 智子

講師 看護学部（小児看護学領域）

Tomoko MIKAMI

キーワード：小児看護 OSCE の実態、ニーズ調査

## 小児看護 OSCE の実態と研修会開催に向けたニーズに関する調査

### 【研究の概要】

本研究では、日本看護系大学協議会会員校 247 校を対象としてアンケート調査を実施し、小児看護 OSCE を実施しているか否か、加えて小児看護 OSCE を実施している、あるいは実施を予定している施設には、その実態ならびに研修会開催に向けたニーズを確認した。調査票の回収数は 92、回収率は 37.2%、有効回答数 92、有効回答率 100% であった。小児看護 OSCE を実施している施設は 92 校中 8 校で 8.7% であった。今後に OSCE の取り組みを予定している施設は、25 校で 29.8% であった。

OSCE を実施している施設において、OSCE 実施の目的は、実習前の技術チェックが 75%、成績評価が 25% であった。また、実施学年は 3 年生であるという施設が 75% で、実施時期は定期試験や技術演習ごと、実習前後等さまざまであった。実施人数は 10 人から 100 人までばらついていた。OSCE はどのように取り組んでいるかという質問に対して、小児看護学領域のみの取組とした施設が 75% であったが、大学全体の取組としている施設も 1 施設あった。実施課題は 1~4 課題作成していた。また、模擬患者を使用している施設は 2 施設あった。そのうち 1 施設は模擬患者を養成していた。さらに、37.5% の施設がシミュレーターを使用していた。研修会に参加したいかどうかという質問では、58 校 63.0% が研修会への参加を希望していた。現在、看護 OSCE を実施している看護系大学は少数であるが、看護実践能力を育てる教育方法として活用できるという観点から、小児看護 OSCE に対する関心が高まっていることがわかった。また、研修会の開催にあたって、具体的なニーズを把握することができた。

山本 勝則

教授 看護学部（精神看護学領域）

Katsunori YAMAMOTO

キーワード：シミュレーション教育、リアリティ、精神看護、患者体験の理解、日本応用心理学会

## 精神看護学におけるシミュレーション教育・患者体験の理解・日本応用心理学会第 83 回大会開催

### 【研究の概要】

精神看護シミュレーション教育、およびその効果について、2015 年度に収集したデータを分析する。教育実施前後の「患者との関わりに関する自信の程度」を問う VAS(Visual Analog Scale)による調査及び心理テストである POMS を分析予定である。また、模擬患者のフォーカスグループインタビューのデータを分析予定である。

「患者体験の理解」を取り入れた看護のモデルを開発し、昨今の問題解決型看護過程を補う介入として用いることができるようとする。そのために、人間関係に重点を置いた看護論やケアリングの理論を見直し、リニューアルして取り込む。特に、オーランドの〈その時その場〉でのニードに応えるという考え方を取り入れて、「患者体験の理解」と組み合わせる。

日本応用心理学会第 83 回大会を、桑園キャンパス（看護学部）で、9月1日（木）と9月2日（金）に開催する予定であり、それを通じて、上記の二つの継続研究を活性化するとともに、研究の範囲を広げる。具体的には、精神看護におけるシミュレーション教育について他大学と交流セッションを検討中である。

応用心理学の  
クロスロード



守村 洋

准教授 看護学部（精神看護学領域）

Hiroshi MORIMURA

キーワード：メンタルヘルス、うつ病、自殺予防

## メンタルヘルスおよび自殺予防に関する研究

### 【研究の概要】

平成 27 年度の研究概要を、アメリカの医師であるカプランが提唱した予防の概念に基づく以下の3つのステージを用いて説明する。

第一次予防：精神疾患の発生原因の防止、つまり、周りの人が気づき・つなぎ・見守ることである。平成 27 年度も悩んでいる人に気づき、話をきき、必要な支援につなげ、見守る役割となるゲートキーパー講習の講師を務めた。

第二次予防：精神障がい者の早期発見と早期治療、つまり、なるべく早い時期における発見と治療開始に強調がおかれる。自殺未遂者が最初に介入するのは救急医療機関であることから、前年度実施した札幌市自殺未遂者実態調査を研修会報告するとともに学会でも発表した。

第三次予防：精神障がい者に対する社会復帰の援助と再発防止、つまり、リハビリテーションへの援助とともに、再発予防が特に注目される。精神障がい者セルフヘルプ・グループへのフィールドワークを継続しながら、北海道精神医療審査会委員および札幌市地域福祉生活支援センター権利擁護委員会などを兼任し、精神障がい者への地域生活支援について保健・医療・福祉の視点で研究を行った。特に権利擁護の観点では、非自発的な精神科病院への入院に伴う患者の処遇改善や退院請求、地域生活を営む際に判断能力を問われる際の支援等である。



星 幸江

助手 看護学部(精神看護学領域)

Yukie HOSHI

キーワード：長期入院統合失調症患者、熟練看護師、  
臨床判断、退院支援、退院時期

## 長期入院統合失調症患者の退院好機を見定める

### 臨床判断要素

#### ～熟練看護師の関わりに焦点を当てて～

### 【研究の概要】

退院支援の困難要因や成功要因、精神看護における臨床判断についての文献は散見されるが、「長期入院統合失調症患者の支援のどの時期が退院時期と見定めているか」という熟練看護師の臨床判断の内容と文脈」についてはほとんど明らかになっていない。

そこで今回、精神科病棟に勤務する熟練看護師が長期入院統合失調症患者の退院時期を見定める際の看護師の臨床判断の内容と文脈を明らかにし、退院支援に向けた効果的なケアのありかたへの示唆を得るために、その第一段階として、看護師にヒアリングを行った。

宮崎 みち子 教授 助産学専攻科長 看護学部（母性看護学領域）

Michiko MIYAZAKI キーワード：女性の健康、母子保健法、労働基準法

## 日本における女性の健康保護に関する法

### 【研究の概要】

子どもを産み育てる特性を有する女性の健康保護は、どの社会においても重要である。それは、次世代育成に大きな影響を与えるからである。そこで日本における女性の健康保護の関連法を見ると、第一に母子保健法がある。これは妊娠した女性を保護する中で、健康な子どもの誕生を迎えるものである。この女性が就業している場合、労働基準法による特定の保護により妊婦の健康保護は確保される。そして、生まれた子ども（女児）が成長し就学期に入ると、学校保健安全法の中で保護される。また、子どもを取り巻く特殊状況の一つである虐待において、その被害児は児童虐待防止法により保護の対象となる。さらに、思春期・成人期の女性の妊娠に際し、その継続・中断に関しては母体保護法が関与する。また、ドメスティック・バイオレンス法は、配偶者からの暴力から女性を保護する。老年期に入り、女性は介護保険法の保護を受けつつ、人生の終結に向かう。このように、女性はその生涯を通じて、切れ目のない健康を獲得するべく、何らかの法の保護の対象となる存在である。私たちの日常において、これら関連法を意識する機会は少ない。しかし、社会の変化に応じた法改正等に関心を持つことが、女性の健康保護の強化につながるものと考える。

渡邊 由加利 准教授 看護学部（母性看護学領域）

Yukari WATANABE キーワード：周産期、夫婦、親、well-being、助産学

## 妊娠・育児期にある家族を力づける支援プログラムの検討

### 【研究の概要】

少子化を背景に子どもと接した経験がないまま親になるため、子どもの成長発達を実感として理解していく、育児中の母親や父親においても自分の育児や子どもの成長発達に自信が持てない状況があります。どんなことが妊娠中、子育て中のご家族の力づけになるかを考えています。その活動として、平成27年度は、研究者と子育て支援総合センター（保育士）、保健所（保健師）と合同で「赤ちゃんがやってくる～先輩ママ・パパと話そう～」を開催しました。

札幌市子育て支援事業 情報誌  
子育てさっぽろ 63号

### プレママ・パパ講座

#### 赤ちゃんがやってくる♪～先輩ママ・パパと話そう～

9月26日土曜日に子育て支援総合センターで、プレママ・パパ講座「赤ちゃんがやってくる♪～先輩ママ・パパと話そう～」が初めて開催されました。

初めての出席を控えた妊婦さんとご主人。今まで子育て経験の先輩ママ・パパ家族が交流しました。どちらもゆったりとした雰囲気の中、男性陣、女性陣に分かれで「(夫に)手伝ってほしいことや家事」「(夫が)実際にやっていることや思っていること」などの中に【なるほど～】と感心しきりのフレーズ、「(パパが休みの時たまには、少し早起きして、子どもと遊んでいたいなあ～」「あるある～」と共感しあうママ達のグループ、それぞれ楽しむような様子が見られました。

話し合った内容を互いに発表をしようと、夫と妻で考え方の違いなどもわかり、お互いの気持ちを知ることで、理解が深まった様子でした。

先輩ママの体験談の他、保健師、助産師からの専門的な助言もあり、安心感を得られた様子でした。保育士の遊びの紹介は、実際に赤ちゃんが楽しんでいる様子が見られ、和やかなムードに。とても有意義な時間となりました。

### 参加者の声

- 父親目撃、母親目撃で違いがあることを実感しました。
- 妊婦さんと話をして、自分の妊娠時代のことを懐かしく思い出しました。
- 先輩ママの生の声が聞けてとても有意義な時間でした。妊娠横断について行こうと思いました。



森川 由紀

講師 看護学部（母性看護学領域）

Yuki MORIKAWA

キーワード：生殖補助医療、不妊女性、育児

## 生殖補助医療によって出産した女性の育児期の体験

### 【研究の概要】

本邦においては生殖補助医療技術の発展によって、多くの不妊女性が生殖補助医療によって妊娠・出産し、母親となる機会に恵まれるようになった。しかし、不妊であることや不妊治療の体験は女性に様々な影響を及ぼす。不妊治療の中でも生殖補助医療によって母親となった女性が、妊娠・出産し育児が開始された後、母親として不適応を起こすことも報告されており、育児生活が円滑にスタートできるような支援を検討したいと考えている。

本研究では実際に育児を体験している母親の治療経過、妊娠経過、分娩経過、育児生活の実態とその経過ごとの心理面を把握し、治療の長さ、治療方法、周囲からのサポート、育児への準備状態などと、育児中の気持ちや、わが子への気持ちとの関連を明らかにしたいと考えている。

山内 まゆみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

Mayumi YAMAUCHI

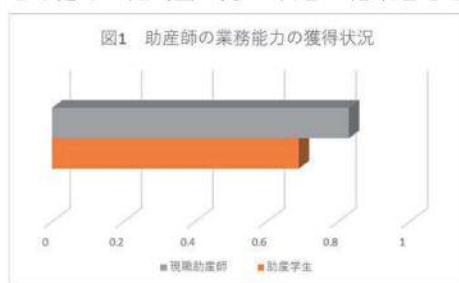
キーワード：助産師基礎教育、助産師の業務能力、自己決定型学習、職業準備性、母乳哺育

## 助産師基礎教育から助産師の継続教育を考慮した 助産師の業務能力の支援方法

### 【研究の概要】

国際的な助産師の職業団体である国際助産師連盟（以下、ICM）が提示する基本的助産業務に必須な能力がある。提示しされた項目を活用し、助産師基礎教育課程にある助産学生の、質問紙調査による卒業時の到達目標の明確化、現職助産師の到達度の明確化を先行研究で進めてきた。その結果、全国の助産学生は卒業時に 69% の学習到達度、現職助産師は 83% の業務能力到達度であることが分かった（図1）。これらの結果をもとにさらに検討した結果、両者に類似する到達度の低い業務能力があることが発見できた。つまり、それらの能力向上に向けた教育支援をすることで、助産師の質の向上につながるということである。そこで、現在は、助産師の継続教育の支援を検討している。おもにシミュレーション教育を柱に、継続教育支援の考案を進めている。

これらの研究過程によって、助産師基礎教育、助産師の継続教育の支援に留まることなく、看護基礎教育における母性看護学の到達目標も、系統だった考案に役立っている。



山本 真由美

講師 看護学部（母性看護学領域）

Mayumi YAMAMOTO

キーワード：看護基礎教育、母性看護学、技術教育、教材開発、装着型産褥子宮モデル

## 産後の子宮の観察のための「装着型産褥子宮モデル」の開発による学習効果の検討

### 【研究の概要】

産後の母親の身体的経過を判断するためには、子宮を正しく触診する看護技術の修得が不可欠である。既存のモデルではコミュニケーションを取り、母親の反応を見ながら技術を提供することができなかつた。そこで母親の反応を観察することが可能となる「装着型産褥子宮モデル」を開発した（図1、図2）。このモデルを母親役になった教員が装着し、12名の学生に子宮の観察を実践してもらい（図3）、その感想を面接にて調査した。その結果、全学生が子宮を観察することができ、合わせて母親の反応も観察できた。さらに、子宮の観察が実習と同じように実施できるため、モデルを使用した学習が有効であることが明らかとなった。



図1：人体に装着した様子①



図2：人体に装着した様子②



図3：学生が子宮の観察を実践している様子

猪股 千代子

教授 看護学部（看護管理学領域）

Chiyoko INOMATA

キーワード：心のケア、ヒーリング環境、健康増進へのケア、統合医療

## 自然治癒力を惹起させる時空間・ コミュニティの設計に関する研究

### 【研究の概要】

今回は、2015年12月5日に開催された第35回日本看護科学学会交流集会（広島日赤看護大学）にて発表した「健康長寿社会を実現するポジティブ看護—生命力を高める七感に働きかける未来看護の潮流ー」を報告する。

交流集会の目的は、統合医療の考え方に基づく、または準じた看護ケアを実践している方・関心を抱いている方たちに、わが国の統合医療や看護の動向などの情報提供、及び意見交換を行った。交流集会の内容は、1)「心とからだの調和を生むケア」をミニ体験していただいた。内容は、①マインドフルネスな状態を体験していただくために、ヨーガの呼吸法の体験、②アロマエッセンスによる芳香療法・音楽を融合させたアートフルなケアの体験、2)ミニレクチャーでは、①統合医療アプローチによって、ウェルネスを増進するヒューマンケアリング未来型チーム医療の構図の提示、②病気の予防と健康・ウェルネスを増進するヒューマンケアリング病院モデルの提示、③統合医療看護における癒しを促進するセルフヘルスケアの基本的行為の提示、④統合医療看護の展開の特徴を、セルフヘルスケア支援の看護師の介入（認知への働きかけ・アートフルなケアの提供・スピリチュアルケア）としてフローチャートで提示した。

矢野 祐美子 講師 看護学部（看護管理学領域）

Yumiko YANO キーワード：看護管理、質評価、可視化

## 看護質指標の活用と質改善

### 【研究の概要】

看護を提供する者にとって、その質の向上は永遠の課題である。「日々行っている看護は本当に質が高いだろうか」「他の病院ではどのような看護を提供しているのだろうか」と考えたことのある管理者が多いと思われる。一方で、多忙を極める現場の看護師にとって、自分たちの看護の質を簡便に評価できることも重要な点となる。

「看護の可視化を通して社会に貢献すること」を戦略基軸としているA病院において、2008年より看護の質向上と可視化を目的に看護質指標の活用を開始した。管理者による質指標の理解と作成から開始し、質指標活用と可視化のシステム構築を行うと共に、中心となるスタッフの育成、部署全体への活動拡大を行った。質指標のベースとなっている質評価の視点（構造・過程・結果）を理解することで、結果のみを追って一喜一憂することなく、構造や過程を評価して改善活動につなげることができる。また、可視化することでスタッフのみならず、利用者の参画を促せることができた。

また、質指標のデータベース構築を試みている。データベースは他施設との比較が目的ではなく、ベストプラクティスから学ぶことで自施設の質改善活動を促進することである。今後も質指標の活用促進とその効果を明確にしていきたいと考える。

坂東 奈穂美 助教 看護学部（看護管理学領域）

Naomi BANDOU キーワード：人材の多様性、多職種の協働、チーム医療、ダイバーシティ・マネジメント、看護師不足

## 多様な人材で構成されたチームや組織のマネジメント

### 【研究の概要】

少子化や超高齢社会により労働人口が減少している。

医療においても、質の高い医療の提供を求めて、多職種が連携するチーム医療が推進されている。医療の専門職は時代と共に種類が増え、チーム医療として連携する職種は増える一方である。しかし、専門性があるがゆえに、お互いを理解し合えず協働が進まない課題も生じている。また、女性の多い看護職では、生活スタイルに合わせた多様な働き方を推奨しているものの、現状として十分に浸透してとはい難い状況がある。このように、多様な専門性や多様な生活スタイルを持った人々の能力を十分に発揮させ、チームや組織に大きな成果をもたらすためには、どのようなマネジメントをすると良いのかといったテーマに取り組んでいる。

小田 和美

教授 看護学部（成人看護学領域）

Kazumi ODA

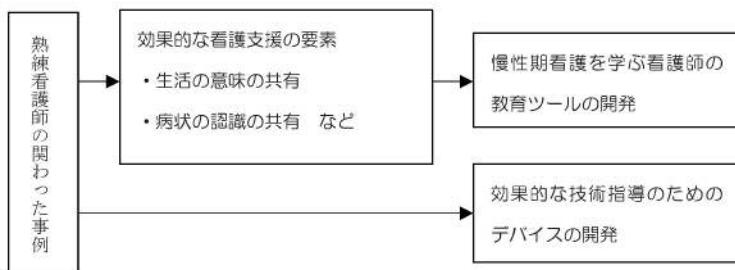
キーワード：慢性期看護、生活習慣病、患者教育、セルフケア支援、糖尿病看護

## 生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な看護援助方法に関する研究

### 【研究の概要】

慢性の病気、特に生活習慣病とともに生きる人々とその家族にとっては、日々の食事や運動などの生活の仕方そのものが病気の進行を予防する治療となります。このような人々を支援するために、看護師のどのような援助の仕方が、その人自身のやる気を促し生活調整に取り組める助けになるのか、効果的な看護援助についての共同研究を継続的に行ってきています。最近では、療養上の望ましい変化をもたらした看護師の関わりとして、看護師と患者さんが生活の仕方の意味や病状についての認識をお互いに共有することが重要であることがわかつてきました。

今後は、看護師の慢性期看護の教育ツールの開発や、さらには効果的なインスリン注射の自己学習のためのデバイスの開発などに発展させていきたいと考えています。



川村 三希子

教授 看護学部（成人看護学領域）

Mikiko Kawamura

キーワード：がん看護、認知症、疼痛アセスメント、教育プログラム

## 認知症を伴う高齢がん患者の疼痛アセスメントのプロセス

### 【研究の概要】

本邦においては急速な高齢化により認知症を伴うがん患者が増えている。認知症を伴うがん患者は痛みを適切に表現できないため痛みの過小評価、過少治療が報告されており、認知症を伴うがん患者の疼痛アセスメント指標を作成することが喫緊の課題である。

本研究は、認知症を伴う高齢がん患者のがん疼痛のアセスメントプロセスを明らかにし看護師教育プログラムとして開発することを目指している。熟練看護師 22 名に対して参加観察と半構造面接を行ない、がん疼痛を判断するまでのアセスメント内容とプロセスを分析中である。

貝谷 敏子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

Toshiko KAITANI

キーワード：看護学、アクティブ・ラーニング、形成的評価

## 看護演習科目へのループリック導入の効果・ループリック評価の信頼性と妥当性の検討

### 【研究の概要】

「看護演習科目」にループリックを導入しその学修効果の評価と、評価基準の信頼性と妥当性を検討した。

症状マネジメント論履修者86名のうち、同意の得られた学生を対象とした。学生への質問紙調査、レポートとループリック評価値を用いた比較調査を行った。

質問紙の回答者は68名で、回収率は81.0%であった。自己評価の高かった項目は「事前学習をした」。

ループリックは「演習評価基準の確認」や「学修到達の確認」に用いたという項目であった。ループリック評価基準に関して事前に教員間で打ち合わせを行った場合は、教員間の級内相関係数ICCは0.81-0.53であった。学生と教員間のICCは各回の担当によってばらつきが大きかった。

ループリックを導入した演習は学生の事前学習時間の確保に有用であった。事前に評価項目に関して教員間で打ち合わせを行うことで、複数の教員間でも一貫した評価が可能なことが示唆された。

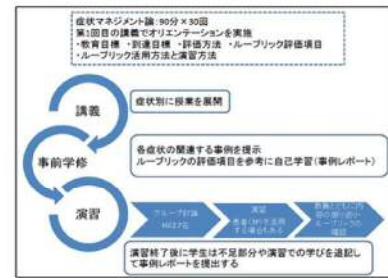


図 ループリックを用いた授業方法

神島 滋子

准教授 看護学部（成人看護学領域）

Shigeko KAMISHIMA

キーワード：リハビリテーション看護、脳卒中、脳損傷、高次脳機能障害、服薬管理

## 学生が考えるリハビリテーション看護の様相

### 【研究の概要】

リハビリテーション看護学の科目履修をしている学生を対象として「リハビリテーションとは何か」「リハビリテーション看護とは何か」について科目的前後で記述してもらった。授業の前後の変化について比較検討を行った。分析はテキストマイニングの手法で行った。

結果：「リハビリテーションとは何か」について、授業前にはリハビリテーションを理学療法士などが行う訓練やトレーニングととらえる傾向が見られた。授業後には全人的な患者その人に焦点があたり生活の再構築にシフトしていた。

「リハビリテーション看護とは何か」については講義前には訓練を支える看護といった喜寿とが見られていたが、授業後には心理的側面や患者の主体性、家族といった周辺の環境も視野に入れた見方に変化していた。

リハビリテーションは治療としての「訓練」といったとらえになりやすいが、社会との障壁などもその概念に含まれることが講義をとおして理解できたと考える。

菅原 美樹

准教授 看護学部（成人看護学領域）

Miki SUGAWARA

キーワード：高度実践看護師、シミュレーション学習、OSCE

## 高度実践看護師の教育と評価に関する研究 —臨床推論・判断力強化を目的とした シミュレーション学習とその評価—

### 【研究の概要】

高度実践看護師の臨床推論・判断力を強化・向上させるには、従来の大学院教育では十分とは言えず、シミュレーション教育の導入や OSCE によるその評価が必要である。そこで、本学研究科の専門看護師教育課程の専門科目「アドヴァンストフィジカルアセスメント」にシミュレーション学習を導入し、その効果について検討することを目的とした。大学院生 2 名を対象に「人工呼吸器ウィニング中の患者のフィジカルアセスメント」に焦点化したシミュレーション学習を実施し、その後 OSCE 評価を実施した。結果、「フィジカルイグザミニエーション」「検査結果の解釈・判断」「治療・管理」の各評価項目は、70% 以上の得点率であった。また、シミュレーション学習および OSCE 実施後の感想・意見から、自分の思考を言語化することで客観的な認知を促すことになっていた。つまり、自分の推論や判断の仕方を俯瞰でき、よりよい推論や判断をするにはどうすべきかと自分の思考を発展させることにつながっていた。



工藤 京子

講師 看護学部（成人看護学領域）

Kyouko KUDOH

キーワード：看護大学生、看護技術、トレーニング

## 看護大学 4 年生に対する 就職前スキルアップコースが与える影響

### 【研究の概要】

卒業直前の看護大学 4 年生に、実技指導インストラクターによる自主参加型スキルアップコースを企画・開催し、効果を検討した。対象者は A 大学看護学部 4 年生（編入生含む）87 人で、期間は 3 月の土日等を除く合計 12 日間、時間は 9:00～17:00（8 時間/日）とした。学生への配慮として、参加は自由意思、事前予約不要、成績に関係しない、針を使う技術では必ずインストラクターがつくとした。技術項目は、1 週目は①輸液ポンプ、シリジポンプの操作②簡易血糖測定、インシュリン製剤の投与③皮内・皮下・筋肉内注射④口腔・鼻腔内吸引⑤浣腸、陰部洗浄、オムツ交換、坐薬挿入であった。2 週目は、①心電図モニター、十二誘導心電図②手洗い、採血（注射器、真空管）③輸液準備、静脈留置針挿入④呼吸音の聴取⑤酸素吸入であった。3 週目は希望する技術に応じた。参加状況は、参加人数 56 人（64.4%）、延べ人数 129 人、1 日の参加人数：0～25 人/日（平均 11 人）、1 人の参加日数：1 日～6 日（平均 2 日）、各項目の平均参加人数 37 人であった。参加者の多かった技術項目は、皮内・皮下・筋肉内注射、ついで、口腔・鼻腔内吸引、輸液・シリジポンプの操作、心電図モニターの順であった。

内容では、実習で経験した技術に関しては手順も覚えていたが、注射については、多くの学生が注射器の持ち方・扱い方を忘れており、注射部位も資料を見ながら確認していた。参加後のアンケートでは、満足度が 10 段階中 8.3 で、多くの学生が、忘れていたことを確認できた、少し自信がついた、もっとやりたいと肯定的に回答していた。

今後も可能な限り、継続していく必要性が示唆された。

藤井 瑞恵

講師 看護学部（成人看護学領域）

Mizue FUJII

キーワード：血液透析、糖尿病、セルフマネジメント、  
生活習慣

## 維持透析患者の生活上の課題

### 【研究の概要】

昨年に引き続き、北海道に住む維持透析患者の原因疾患、合併症の数、自覚症状、ADL、精神的健康度、通院状況の関係を検討した。その結果、原因疾患として糖尿病性腎症の患者は非糖尿病の患者に比べ、透析導入年齢が高く透析年数が短いが、ADL が低く就労割合も低く、透析期間が長引くにつれて社会的支援をうける割合も低くなっているため、糖尿病性腎症由来の患者への支援が特に必要性が示唆された。

通院状況に関しては、今回は調査対象者が石狩支庁に集中していたため道内 4 支庁地域による通院時間・手段などに差はなかった。しかし全国的には透析患者の高齢化と共に、通院困難な透析患者への送迎や長期入院透析が問題となっている。そのため、今年度は北海道における通院困難患者の状況と、長期入院・施設入所透析患者の抱える問題を調査した。今後適宜分析・発表予定である。

柏倉 大作

助教 看護学部（成人看護学領域）

Daisaku KASHIWAKURA

キーワード：周手術期、回復強化、栄養、看護

## 栄養状態が最も良好な状態で手術を受けるために 看護師は何ができるのか

### 【研究の概要】

「人は、何を食べると最も健康になるか」

これが、本研究の核となるテーマである。世間では、「食」に対する興味関心は日々高まっており、「～を食べると健康になる」といったテーマでの論述は多く見受けられる。平均寿命は世界トップクラスの日本だが、悪性腫瘍を代表とする生活習慣病や自己免疫疾患、難病の罹患率は増加し続けており、医療費も増加の一途をたどっている。なぜ、このような病気を抱える人は増えてしまうのだろうか。また、どうすれば病気に必要な治療をより効果的にできるのだろうか。本研究では、普段の食事や身体の栄養状態が、病気の予防や治療効果に大きく関与することを前提にしている。

近年、手術を受ける患者の回復を促進する、術後回復強化 (ERAS: Enhanced Recovery After Surgery) プロトコルが注目されており、術後合併症のリスク低減に寄与している。ERAS では身体の栄養状態にも着目しており、患者の栄養状態改善には、看護師の役割が重要である。本研究では、術後の回復強化に関連する要因と看護ケアとの関連を明らかにし、手術を受ける患者に対して看護師がより効果的なケアを実践するための ERAS 看護ケアガイドラインの構築を目指している。

河原田 まり子

教授 看護学部（地域看護学領域）

Mariko KAWAHARADA

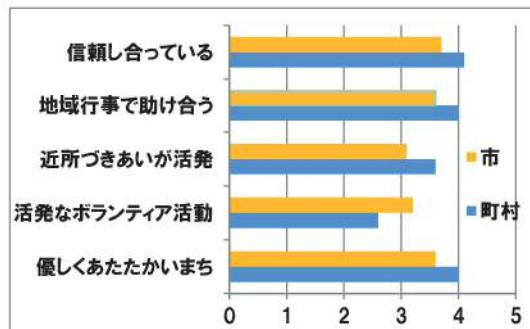
キーワード：ソーシャル・キャピタル、健康、  
地域住民、地域保健活動、保健師

## ソーシャル・キャピタルを活用した地域保健活動の推進 ～自治体規模でみたソーシャル・キャピタルの特徴

### 【研究の概要】

地域の人々の絆は、近年ソーシャル・キャピタル（以下、SC）と概念化され、健康との関連が明らかにされています。東日本大震災において人々の絆の重要性が再認識され、人々の健康を支援する地域の保健師活動においてもSCの醸成支援が期待されています。そこで、地域の人々の健康支援に生かすためにSCの研究に取り組んでいます。北海道内の全市町村の保健師係長を対象に前年度に実施したSC調査結果を解析しました。市と町村の2群に分けて、信頼・助け合い・ネットワークとまちに対する思いについて、地域差を解析しました。

町村では人々の信頼が高く、身近な助け合いが行われ、人に優しいあたたかいまちを感じていました。町村は近所づきあいが活発で、市は健康づくりの場が多く、ボランティア活動が活発という特徴がありました。まちへの愛着については地域差がなく、地域の人間関係のあり方に違いはあるものの、自分の住むまちを大切にしている実態が明らかになりました。



清水 光子

准教授 看護学部（地域看護学領域）

Mitsuko SHIMIZU

キーワード：都市部、高齢者、ソーシャル・キャピタル

## 都市に暮らす高齢者のソーシャル・キャピタル の実態と今後の地域保健福祉活動

### 【研究の概要】

65歳以上の地域住民1500人に健康及び生活状況についてアンケート調査を実施した。  
有効回答651を分析したので報告する。

主観的健康感が高い（健康状態がよいと感じている）高齢者は、80%、孤独感を訴える者は10.4%、うつ状態の可能性がある者は35.4%だった。男性は女性に比べ、主観的健康感と外出頻度が有意に高かった。一人暮らしは他の世帯に比べ、女性、介護認定あり、地域のサポートあり、孤独感ありが有意に高かった。後期高齢者は、主観的健康感と外出頻度が低く、介護認定や地域のサポートを受けていた。ネットワークはある（家族や知人と毎日連絡をとっている）者は31.8%、互酬性がある（近所の誰かが助けを必要とした時手を差しのべることないとわざだと思う）者は73.2%、信頼性がある（この地域における人は信頼できると思う）者は65.4%であった。主観的健康感とネットワークに関連が見られたことから、ネットワークを高める支援が必要であると示唆された。

また、うつ状態の可能性がある者は、後期高齢者、一人暮らし、介護認定あり、地域サポートあり、外出頻度が少ない、主観的に健康でないが有意であった。また、ネットワークが少なく、信頼できない、互酬性を感じないも有意であった。3割以上の人々にうつ状態の可能性があることを考えると、介護予防と共にこころの健康を支援する取組が必要であると考える。

近藤 圭子

助教 看護学部 (地域看護学領域)

Keiko KONDO

キーワード：自己効力感、健康行動、高齢者

## 農村地域在住高齢者の自己効力感と健康に関する研究

### 【研究の概要】

わが国は、高齢化率が上がり、医療費や介護費が増え続けていることから、高齢者の健康を保つことや、高齢者が自立した生活を送ることは、極めて重要な課題である。高齢者に関する社会保障費も増え続けており、国や地方の財政を圧迫している状況である。また、平均寿命と日常生活に健康上の制限のない期間、すなわち健康寿命の差が拡大してきているとの報告もあり、高齢者の健康を保つことは、社会保障給付費を減らすだけではなく、いきいきと豊かな生活を送り続けるためにも重要と考える。高齢者ができるだけ介護を必要とすることなく、自立した生活を送るためにには、高齢者自身が健康に対する意識づけを高めることや、良い生活習慣の保持が重要である。

農村地域在住高齢者を対象として、自己効力感と健康行動が健康関連 QOL に及ぼす影響について検討することを目的とした研究を行っている。

ある農村地域での調査結果から、健康管理に対する自己効力感と健康的な生活習慣に関連があることを示した。このことを踏まえて、農村地域の高齢者の自己効力感、健康行動との関連や健康に対する意識についての研究を進め、保健師等の地域の健康支援を行っている方と共に、農村地域特有の健康課題を検討していきたいと考えている。

田仲 里江

助教 看護学部 (地域看護学領域)

Rie TANAKA

キーワード：ソーシャル・キャピタル、都市、高齢者、  
住民のサポート、グループインタビュー

## 地域保健分野におけるソーシャル・キャピタルに関する研究

### 【研究の概要】

### 【目的】

近年、少子高齢化などの急速な社会状況の変化を背景にして家族機能の縮小、地域共同体における危機対応能力の脆弱化など多くの課題が浮き彫りになっている。平成 24 年 7 月の地域保健対策推進指針の一部改正により、ソーシャル・キャピタル(以下、SC)に注目した地域保健活動へと方向転換を進めている。これまででも保健師は地域保健活動を通して、地域の SC を醸成する活動をしてきた。本研究では、地域保健活動における SC の醸成に貢献していた保健師活動の特徴を明らかにすることを目的とした。

### 【方法】

対象は、北海道、長野県、沖縄県、石川県の 4 道県から協力の得られた 5 市町村に勤務する経験年数 5 年以上の保健師 11 名とした。調査期間は、平成 25 年 9 月～11 月とした。インタビューは半構成的面接法とし、これまでの地域保健活動を通して認識する SC を醸成する保健師活動について尋ねた。分析は、質的記述的分析を行った。共同研究者間で解析結果を検討し、真実性の確保に努めた。なお、本研究は札幌市立大学倫理委員会の承認を得て行った。

### 【結果】

対象者の保健師経験年数は 8 年～29 年であった。SC を醸成する保健師活動は、次の 9 つの【カテゴリー】が得られ、30 のくサブカテゴリー>で説明された。

### 【考察】

本研究結果より、保健師のブリッジ型の SC を意識した仕掛けが説明された。さらに、保健師自身が地域の SC 醸成のキーパーソンとしての役割を担っていることが明らかになった。

スーディ神崎和代 教授 看護学部（在宅看護学領域）

KANZAKI-SOOUDI,  
Kazuyo

キーワード：医療事前指示書、終末期、意志と願い

## 意思決定を支援する医療事前指示書

### 【研究の概要】

国民の 60%以上の人人が「在宅で終末期を迎える」と答えるながらも実際は約 13%のみが在宅で亡くなっている。北海道に於いては 8.7%と更に低い。それには自然環境を含む諸要因以外に、終末期医療に関する自分の意思を明確にして家族や主治医に伝える手段の一つである「医療事前指示書」についての認知度が低いことがある。自分の医療処置についての判断が困難になり、回復の見込みがないと判断された時のために、市民の意見を取り入れた当人の意思が尊重される医療事前指示書が必要と考えた。130 名以上の医療職者・市民・弁護士など意見を経て「医療事前指示書案（以下、指示書）」を作成するに至った。ここでは第一回の小グループ検討会での市民の意見の分析結果を報告し、事前指示書第一案に対する市民の印象を検証した。事前指示書に関心のある市民にフォーカスグループ形式で「事前指示書案」を見てもらい、「告知×苦痛緩和」「告知×苦痛緩和×栄養摂取」「感染症への対応×意識が低下した時に望むこと」の各項目について 50 分間の意見交換をしてもらった。意見内容は Berelson, B.法で内容分析を行った。事前指示書の重要性・必要性は理解しているが、「終末期の自分」の想像が難しく、亡くなった家族・友人の状況を参考にしながら判断をしていた。事前指示書案の内容には違和感は持つておらず、寧ろ終末期の状況を想像することに困難を示していた。挿入している絵図は判断支援になっていた。



菊地 ひろみ

准教授 看護学部（在宅看護学領域）

Hiromi KIKUCHI

キーワード：訪問看護ステーション、新卒看護師、  
教育プログラム

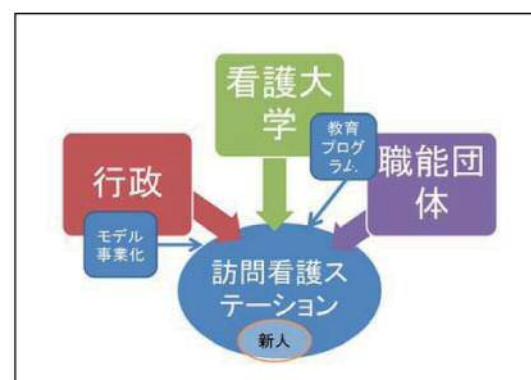
## 訪問看護ステーションの看護師教育プログラム開発に係る研究

### 【研究の概要】

地域包括ケアの確立が各自治体の課題となっている現在、在宅医療の受け手である訪問看護師の確保は喫緊の課題である。しかし、訪問看護ステーションにおける新人看護師の受け入れおよび教育を事業所単体で実施することは、経営的にもプログラム的にも困難であり、自治体や大学が協力して体制を構築する必要がある。

札幌市内の複数の訪問看護事業所を対象に行ったヒヤリングでは、看護師の新人期間の経営への圧迫などの条件をクリアして、新卒看護師を受け入れ、教育する意向を表明する事業所が複数あった。今回それらの事業所、法人と協力して、新人教育プログラムについて検討した。

在宅看護に関心のある学生は増えているが、実際に 在宅看護の現場に飛び込むには、なおいくつかの課題が存在する。学生が進路選択として在宅看護を検討する際の促進要因と阻害要因について今後研究を進めていく必要がある。



御厩 美登里 助教 看護学部（在宅看護学領域）

Midori MIMAYA

キーワード：訪問看護師、職務継続、職場環境

## 訪問看護師の職務継続意向に関連する要因 —訪問看護特有の職場環境に焦点をあてて—

### 【研究の概要】

目的：訪問看護師の職務継続に関連する要因を、訪問看護特有の職場環境に焦点をあてて明らかにすることである。

方法：北海道の訪問看護ステーションで訪問看護に従事する管理者を除いた常勤・非常勤看護職を対象に、無記名自記式質問紙調査を行った。

結果：対象者 437 名のうち 252 名から回答が得られ、回収率は 57.6% であった。ロジスティック回帰分析の結果、訪問看護師の職務継続意向と有意な関連のみられた項目は、「運営主体が社団法人である」「訪問看護ステーション内に休憩スペースがある」の 2 項目であった。

考察：運営主体と職務継続意向とが関連していたのは、社団法人の理念や組織運営の特徴による可能性もあるが、さらなる検討が必要である。また訪問看護師の職場環境には規定の休憩時間をとることが難しいという特徴があると考えられるが、休憩スペース等の職場環境を整えることで、職務継続意向を高めることができる可能性が示唆された。

村松 真澄

准教授 看護学部（老年看護学領域）

Masumi MURAMATSU キーワード：介護老人福祉施設、口腔ケア、OAG

## 介護老人福祉施設に入居する高齢者の Oral Assessment Guide(OAG) の 2 年間の変化

### 【研究の概要】

本研究の目的は介護老人福祉施設入所者 80 名に研究協力の説明し、2014 年と 2015 年の 2 回の口腔診査に協力した 22 名 (36.7%) のデータを分析対象とした。調査項目は、OAG とした。分析方法：基本統計量、Wilcoxon の符号付順位検定を行った。有意水準を 5% とした (IBM SPSS Statistics22)。本研究は倫理審査会の承認を得て実施した。

対象者の背景は、男性 3 名、女性 23 名、平均年齢  $84.5 \pm 7.3$  (69-98) であった。OAG の合計点数の平均は 2014 年  $12.0 \pm 1.8$  (9-17)、2015 年  $8.3 \pm 0.6$  (8-10) であった。OAG の合計点数は、2015 年が有意 ( $p=0.000$ ) に低かった。

2014 年調査の後、施設では、看護師と介護士による口腔ケア委員会が立ち上げ、口腔アセスメントの導入と個別口腔ケア計画の立案がなされ、歯科医師による口腔機能体制維持への支援体制（2015 年加算は取れていない）を作った。

施設何に口腔ケア委員会が立ち上がり、口腔の評価がされ、個別計画が立てられ、近隣歯科医師による口腔機能体制維持への支援体制ができれば、スタッフの口腔ケアの質が向上し、対象者の口腔内状態が良くなることが示唆された。

原井 美佳

講師 看護学部（老年看護学領域）

Mika HARAI

キーワード：尿失禁、中年期女性

## 寒冷地に居住する中年期女性の尿失禁についての検討

### 【研究の概要】

日本の高齢化率は 26.0%となり、2055 年には 39.4%になると予測されている。このような超高齢社会における老年期の健康のためには、中年期からの健康管理が重要である。本研究の目的は、寒冷地に居住する中年期女性の尿失禁の状態について検討することである。

平成 27 年 10 月に無作為抽出した A 市の中年期女性 800 人を対象として自記式質問紙を用いた郵送法調査を実施した。本研究における「尿失禁あり」の定義は、ICIQ-SF (International Consultation on Incontinence -Questionnaire) の尿失禁頻度について、「なし」以外的回答とした。質問紙の調査項目は、基本属性、活動、体格、既往歴、家系的素因、生活習慣、ICIQ-SF 日本語版など 57 項目から構成した。

A 市に居住する中年期女性の尿失禁有病率は 37.2%であった。尿失禁の頻度は、「おおよそ 1 週間に 1 回、あるいはそれ以下」と比較的軽度であった。尿失禁の場面では、「せきやくしゃみをしたとき」の腹圧性尿失禁が有意に多かった。歩行時間は尿失禁に伴う生活の質に有意に影響していた。Concluding message 本研究の限界は、すべてのデータが対象者の自己申告によるものであること、対象者数が少なく選択バイアスの可能性が存在することである。しかしながら本研究では、寒冷地に居住する中年期女性の尿失禁の有病率と尿失禁のタイプ、尿失禁に関連する要因について検討した。

中田 亜由美

助手 看護学部（老年看護学領域）

Ayumi Nakata

キーワード：高齢者、社会参加、生きがい、健康寿命

## 高齢者の外出困難要因の明確化

### 【研究の概要】

高齢者が外出できなくなると、体力・筋力の低下、認知症の発症、持病の悪化、社会との接点の欠如などからくる心身への悪影響や懸念されます。高齢者の外出困難要因を取り除くことによって、高齢者の介護予防、健康寿命の延伸、孤立化を防ぎ、高齢者が自由に外出して社会参加することにつなげるため、高齢者の外出困難要因を明確化する目的として、2014 年 9 月～12 月に北海道 A 地域において調査を行いました。対象は、A 地域にお住いの訪問看護・訪問介護事業所を利用している 55 歳以上の者としました。同意の得られた 12 名を対象に、インタビューガイドに沿って、半構造化インタビューを行い、同対象者 12 名のうち同意の得られた 10 名の住宅の敷地内空間を調査しました。現在、人的要因については、質的研究の分析方法に基づき、インタビューで得られた内容をデータとし、対象者の外出困難要因となる内容について概念をコード化し、カテゴリを生成するという方法で分析をすすめています。環境的要因については、立地的要因と空間的要因を対象者別に整理し、分析をすすめています。

## 札幌市立大学 教員研究紹介2015

編 集 札幌市立大学地域連携研究センター  
発行日 2016(平成28)年7月15日  
発 行 札幌市立大学地域連携研究センター  
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目  
TEL.011-592-2346 FAX.011-592-2369  
<http://www.scu.ac.jp>  
E-mail : [crc@jimu.scu.ac.jp](mailto:crc@jimu.scu.ac.jp)



[www.scu.ac.jp](http://www.scu.ac.jp)

札幌市立大学  
SAPPORO CITY UNIVERSITY